

初日の出



2025年1月1日(水) 晴れ

2025年元旦、よく晴れて、初日の出もしっかり望めた。年末晦日に大阪城公園梅林へ行ってみた。『蠟梅』は咲き始めていたが、『冬至』はまだだった。旧暦の元旦は今月29日、その頃には梅だより。

— 無理なく —

今年は旧暦では閏6月がある。通常の旧暦6月が終わって、また6月が始まる。新暦の7月25日から8月22日まで。日本でも昔はアパレル業界では旧暦を参考に生産計画を立てるといわれたが、今はどうだろう。

6月が2回もあると、そうでなくても長い夏になってきたから、厳しい暑さとの延長戦を予測。考えるだけでも気がとおくなりそうだが、とにかく、構えと備えが大事。

新年が始まったばかりだけど、5月末までが一つの勝負どきと個人的には心得ている。〈余計なこと〉にもカラダが動きやすい、季節的に。梅雨から夏の間の停滞もやむなしと考えることにした。その方が健康的。

ともあれ、無理なく動けるときに動いて、メリハリつけて、日々をおくっていきましょう、おたがいに。

2025年1月2日（木）

新年、連日の冬晴れ、大阪城公園梅林へ



年末にもチェックした「冬至」、開花はまだ先



2025年1月6日(月) 雨

元日から昨日まで京阪神は穏やかな天気恵まれた。ずいぶん乾燥していたから雨もよし、小降りだからそう思えるのだろうけど。

— どのようなPAか (3) —

『見える仕事の見えない働き』④ 奉仕すること

「奉仕」をgoo辞書で調べると、一番目の説明は「神仏、主君、師などにつつしんでつかえること」となっている。2番目が「利害を離れて国家や社会などのために尽くすこと」。どちらも崇高すぎる。

英語の「ボランティア」の方が合っているかもしれない。英語では、「誰かこれやってくれない?」と先生が生徒に尋ねる場合などに使ったりする。「志願者」という意味から、自主的に何かの活動や仕事を無償でやることを指す。

『無意識にやって人に喜ばれること、それが本物』(佐藤初女)、この言葉に出会ったのは2014年6月のことだった。事務所をもって20年目の年あたり、自他ともにわかってきた、見えてきた感じが自分なりにしていた頃だった。

無意識に、ごく自然に、まったく負担に感じることもなく、見返りをもとめず無償で自主的に人のために何かをやる、できる。たぶん、それが続いている理由だろうし、何より「パーソナル・アシスタント」という概念を発想できた根本。そんな風な目線をもったのだった。

さて、その自分の目線は正しいだろうか。紐解いてみるとしよう。

2025年1月8日(水) 晴れ

今日もまずまずのお天気、ただし冷え込んでいる。金曜にかけて京阪神でも雪がふる予報。すっかり日常にもどっているけど、正月もまだ8日。明日から「戎さん」だし、3連休になるし、もう少しお放月気分でも許される?

— どのようなPAか (3) —

『見える仕事の見えない働き』④ 奉仕すること(続)

10年ほど前になるが、ある交流会でたまたま居合わせた人が自己紹介の中で、「仕事とはいえ、ながながと聴いてられませんからね」と言って、カウンセラーを仕事にしようと考えたけど休止中だと話した。

“そういう人がそういう仕事を指すのはダメじゃないか…”。とっさに口に出かけたが、おさえた。それにしても、なぜカウンセラーを目指したのだろう。そこが不思議だった。

最初の事務所の時はいろいろな人が訪ねてきた。わけのわからない業で事務所まで構えた女性がいると、興味をひいたようでもあった。知人がその知人を呼んで、一緒に、または単独でやってきた。

ある日おとずれたのは起業してまもない男性だった。メディア関連のその事業はけっこう注目を持たれていた。当所にやってきた目的は特になさそうで、単に「人となり」を見にきたんだろうという程度で迎えた。

実際おたがいの仕事のことや、なぜその仕事なのかとか、たがいの問題意識や思いなどを話し始めた。ただ、そのうち気づいてきた、相手は自分の話を、いたってプライベートな話も一生懸命するけど、こちらが話しますと、顔の表情が「うわの空」。ひょっとして、聴いてない？

1時間、2時間、3時間、…。さすがに4時間目に入る頃には、いつ帰るのだろうと頭をよぎり始めた。でもこれは、『Helping Interview 援助する面接』（アルフレット・ベンジャミン 1990年）かもしれないと、状況を読んだ。

「パーソナル・アシスタント」の一つの役割に「聴く」があると考えていた。だから図書館で『Helping Interview』を見つけた時には、うまく言い当ててもらった気がして、買って読んだのはこの1年ほど前のことだった。

聴いた時間は結果的に5時間をすぎた。それとなくこちらが時間を指したから、先方は帰っていったが、そうでなかったから、もっと居たかもしれない。ヘルピングになったかどうかはわからない。でも、よく話せてすこしスッキリした、ということにはなったろう。

翌日だったか、知人の経営者の人と話していて、「昨日は5時間も話していった人がいて…」と軽く話題にしたら、「えっ?! それは料金をとらないと!」。そう言われて初めて、おカネにつなげて考えていない自分を覚った。

2025年1月10日(金) 晴れ

今朝の気温0℃、さすがに寒い。インフルエンザ感染者数は過去最多を記録したそう。元々あまり人の多いところには行かないけど、気をつけよう。

— どのようなPAか (3) —

『見える仕事の見えない働き』④ 奉仕すること(続2)

年を重ねるといのは本当におもしろい。そう実感したのは2012年末のことだった。ある重要な出来事があり、“こんな気持ち、認識を自分がもつことになろうとは…”。

長く生きていると〈自己刷新〉する局面に合う。こういうことがあるんだ、これからもまだまだあるかもしれない。そう考えると、長生きはすてたものじゃないと感じた。

その時からも干支を一巡りしたが、少しずついろんなことがわかってくる、というか、時間が経過すればするほど、紐解かれているようで、それがちょっとした爽快感。

過去のある出来事をたまたま話した相手に、自分にとっては意外なことを指摘される。感じたことを口にだして言ってくれた人たち感謝である。

象徴的な一つは、「えっ、おカネが返ってこないのに、そんな風に考えられるの?!」。

学生時代の親しい友人が借りたまま音信不通になったが、10年後ぐらいに街でばったり会った。先方はバツ悪そうにしていたが、ひさしぶりだし、そのままお茶に誘った。

すんなりついてきた。この間の話をいろいろ聞いた。聞いて、それならよかったと思った。海外を一人旅したというから、ということはある程度は自分らしく、自由に生きてこれたということ。「じゃ、元気で」とわかれた。

この一件を一つのおもしろい話題として雑談で話したら、相手が目を丸くしたのだった。貸したものを返さず、本人は人生を愉しんでいるなんて、それでよく平気でいられね、と呆れられた。

でもそんな風にはまったく考えなかった。文学少女で、音楽好きで、親との縁は薄かったようだけど、いつも明るかった。そういった面が保たれていそうで、それならよかったと。

実はこの一件にはオチがある。また10年ほど経ったときに街でまたばったり会った。詳しくはともかく、音信はこちらから断った。

2025年1月14日(月)

本年最初の満月(7:27)、今夜よりも朝のうちなので、撮る

朝6時半ごろ、西に沈む前の満月



2025年1月14日(火) 晴れ

日の出時間はまだ7時台、6時半ごろはまだ暗い。今日は新年初の満月で、朝のうちの7:27、だから満月がよく望めた。次の新月が旧暦元日、1月29日。

— どのようなPAか (3) —

『見える仕事の見えない働き』④ 奉仕すること(続3)

日本である小さなシンポジウムのために海外から訪れた研究者たちを日本側の受け入れ関係者の一人に30年以上の付き合いになる友人がいた。後日ランチしながら当日の話をきいて、びっくりした。

日本側の誰も〈打ち上げ〉のことまでは頭がいてなかった、余裕もなかった。でも海外組は当然セッティングされているものと期待していた。シンポジウムでの高揚感も手伝って、声もあがった。そのまま近くの居酒屋へ流れた。

「代金はわたしが払った、みんなが興じている間に、だした」。丸くおさまるなら、それでいいと思って、言ったのだった。これは15年ほど前の話だが、その瞬間、続いているワケがわかったような気になった。

余裕またはゆとりには2つあるという。経済的ゆとりと精神的ゆとり。奉仕はたぶん精神的ゆとりの一つの表れだろうと思う。そういった精神を持って生まれた人もいるだろうし、社会生活の中で鍛錬して少しずつ備えてきた人もいる。大抵は後者ではないか。

いろんな階層の、いろんな立場の人が、ところどころで、奉仕している。必ずそういう人がいる。独立してまもなくそう実感する場面に出会った。その実感は今もかわらない。

「あなたはまた誰かに奉仕しているんだから、いいですよ」。いつも気にかけてくれる方にあらためて感謝の言葉をのべたら、ごく何げなく返ってきた。「恩おくり」が描けていて、実践されている。そう覚って、感服した。もうずいぶん前のことである。

2025年1月15日(水) 雨のち晴

早朝に雨が降った。家を出るときにはやんでいて、午後にかけて晴れてくるよう。今夜から明日にかけてぐっと寒くなるというけれど、日中8℃なら、それほどでもない。ともあれ暖かくしてすごそう。

— どのようなPAか (3) —

『見える仕事の見えない働き』④ 奉仕すること(続4)

「日本は無名の人が偉い。目立たないところで勤勉と工夫で日本を支えている」(中井久夫)、この一文を著書の中に見つけた時、自分の見立てはそれなりに共通認識されていることなんだと気づいた。

一個人のけっして広くはない世界だけど、そこここに、奉仕的な人がいる。ライフワークとしてやっている人もいれば、企業に属して本業の中でがんばる人を後押しする。自分に誇れるものがあるとするれば、彼らと世界を共有していることだと、『自業のすすめ』をまとめる過程で覚った。

そんな彼らの別々な人から同じメッセージを贈られたことがある。2007年7月と8月、『あなたの中の最良のものを』（マザーテレサ）。帰ってからゆっくり読んだ。

なぜこれを、ぜひわたしに、と感じてもらったのか。わかるようで、わからない。手渡されるまま、ぱっと見ただけ、理由を尋ねるのもヘンだ。たぶん尋ねたとしても、言葉にするのが難しく、「何となく」ということではないか。それはわかる気がする。

スマホのない時代、友人同士の悩みなど、電話で長々を話し合った。どちらかといえば、聴く側だった。時には堂々巡りの話になるが、こちらも言うことは言うので、なんとも思わなかった。

会食を誘ったのは相手なのに、いつもこちらがアレンジする。けっこう時間をとられるのだけど、率先してやっていた。皆が気持ちよく集まり、愉しめればそれでいい。そんな感じだった。

こういうことに自分では注目していなかった、初回に書いた、『無意識にやって人に喜ばれること、それが本物』（佐藤初女）に出会うまでは。はじめて注目して、なぜ「パーソナル・アシスタント」なのかということも含め、いま現在の自分のあり様がわかった気がした。

どうわかったか、それを言葉にするのは難しい、「何となく」。

2025年1月17日（金） 晴れ

昨日に続き冬晴れ、空をみるだけで、晴々としてくる。日の出時間も今月12日に反転し、これから少しずつ朝にも新しい季節のめぐりを感じるようになる。立春は、今年は2月3日。

— どのようなPAか (3) —

『見える仕事の見えない働き』④ 奉仕すること(続5)

「パーソナル・アシスタント」は仕事のコンセプトというより、自分を生きるコンセプトなのだと言点がいって久しい。そう思えることがしあわせなのかもしれない。

しあわせといえば、ごく最近になって、少しは自分も大人になった、と心底思えるようになったことも、さいわい。「パーソナル・アシスタント」のための芽はあったとしても、未熟なままではそのうち枯れる。

大人の入口は、やはり大人。芽をしっかりと見てとってくれた大人たちが近くにいたのが決定的だった。しらず知らず導かれていたのだと、長い時間の後に覚った。思い出すたび、よくぞ出会ったもの。

自分側に目をむけ褒めるとすれば、独立を想起し、決断し、実行したこと。混沌期から学習期を経て、自分なりの知的資源を収穫することになった。その一番は自分を知る旅になったこと。それは今も続く。

交流が短い人の中には、ずっと前から今のような人物像をえがいてもらうが、そんなはずはない。なんとか今のところに辿りついていると言うと、意外そうな、でも、ぱっと明るい表情に相手になる。

師とみる人も何かしら努力を続けている。たぶんそれを見てとり、とっさに希望のようなものを感じて、表情に表れたのだらうとおもう。5年ほど前のこと、すごく印象にのこっている。

努力といっても、よく言うように、無理はいけない。その「無理」の中には、他に迎合して、ということも入る。自分の価値観や志向性とは相容れないのに、臨むと、追って弊害がでる。心身や人間関係などに。

とはいえ、そうはいかない人の方が多いだろうと想像している。そういった人の中に、ある節目で、自分に合った道を捜し始め、偶然にめぐり合わせた時に役に立てるよう、無理はせずでも努力は続ける。そう覚ったのも、遠くない、3年前のことである。

2025年1月20日(月)大寒 晴・曇

夜中のうちに雨が降ったよう。乾燥続きだったから、恵みの雨。なんたあって、花粉が飛び始めている。先週初めから瞼が赤くなっていた。気をつけよう。

— どのようなPAか (3)

『見える仕事の見えない働き』⑤ 守ること

何かの拍子に表れる観念は20秒しか持続しないらしい。危険回避のためにも人間はそうできているという。

そんな風にある瞬間自分の頭に浮かんだ考えの内、大事のものは記録し一覧にしている。たまにそれらを見返すと、当時の心境や状況がよびがえる。試行錯誤、切磋琢磨している姿がわれながら、いとおいしい。

書いたものが残るのは二次的なもの。「書く」というその作業と時間をつかって、われにかえり、問い、軸がぶれないよう心身に憶えさせる。そのためにやっているのだとおもう、あえて書くのは。

ただ究極のものは書いておかなくても、しっかり憶えている。ココロの底から確信して、ずっと守っていることがある。独立を決心して動きだしてまもない時のこと。淀屋橋駅ホームの階段をあがる瞬間にあらわれた考えが、それ。

“けっして目先の利益に惑わされてはいけない…!”。好調が続くことはない、必ず苦境に遭う。その時に安易な道を選ぶと、往々にして道は外れたままになる、ビジネスの世界では特に。

まがりなりにも読書を通して、経営の人の世の〈よくある話〉は了解していた。惑わされた後の道のりも容易に想像できた。どんなに大変でも、目先の利益には、けっして惑わされまい…。

全ての始まりの初めに降りてきたこの直感あるいは直観は、天からの声、『転ばぬ先の杖』を授かったように感じる。ありがたい。

駅のホームから階段を5段ほどのぼる間の一瞬であったが、シチュエーションと心持りは今も鮮明におぼえている、30数年も前のことだけだ。

2025年1月23日(木) 晴れ

今日も晴れ、昨日以上に暖かくなりそう。風景も1月の感じがしない。長期予報では「春ははやい」そう。四季はどこへ。

— どのようなPAか (3)

『見える仕事の見えない働き』⑤ 守ること(続)

憶えようとおもわなくても憶えていることがあり、守ろうとおもわなくても守っていることがある。前者は「岡潔」のいう「印象」にあたり、後者は「資質」かもしれない。

ところで、守ろうと意識していないことは、何を守っているか自分で気づかない。対象的な場面を目の当たりにした時はじめてハッとする。

同じ機関の同じプログラムで、他の講師の講演をアブザーバー受講していたときのこと、“こういうことはしていないなあ、自分では…”と初めて気づいたことがある。それは、自分の仕事の宣伝。

これまで数多く講師をつとめてきたが、自分の宣伝をするという発想はまったくなかった。無償でフォローアップするので何かあったら気にせず連絡を、と話したことはあるが、宣伝は一度もしたことがない。

そのことに気づいた。これは、個人的には貴重な発見だった。ということは、まだ他にもあるはず。それらを束ねたものが、その人の「流儀・スタイル」になるか…?という考えが浮かんだ。

さて、他に何があるだろう…と自分を見返した。そう、単独の講師のときでいえば、会場には自分が先に入って受講者を迎える。開始前の時間にこちらから声をかけ、場をやわらげる。

そう、その仕事に意味があると感じられれば他の半分、三分の一でも引き受ける。そう、「今度是一緒に食事でも」と自分から誘ったことは、時間が経っても実行にむけて必ず声をかける、などなど。

挙げていくうちに、他者にイメージされていそうなく自分ならではの構造がすこし見えてくる感じがした。この一連の観察はそのまま仕事にも生きた。仕事上の新しいツールを創案することになった。

発見があると、発展があるもの。

2025年1月25日(土) 晴れ

今朝もよく晴れている。気温も陽ざしも風も、このところは1月の感じがしない。今日の気温は少し下がる予報だけど、それでも11℃。このままだとこの冬着ずにおわるコートあり。

— どのようなPAか (3)

『見える仕事の見えない働き』⑤ 守ること(続2)

あなたにとって幸せとは何かと尋ねられて、「守るべきものがあることです」(岡田准一 2006年雑誌Graziaのインタビュー)。

そのココロは、「こう生きたい、という自分の意志はもちろん大切だけれど、いろんな人の想いを、僕はたくさんいただいているんですよ。それも、守るべきものですよね」。

まったく同感。それにしても20代半ばでそう言えることがすごい。「本が人生の教科書だった」というほどの読書家だということはこの時知った。この時というのは、旧知の方から記事のコピーを頂戴して。以来、ファンでもなんでもないけど、いち個人と敬意をもっている。

ときどき冗談めかして人に、「もし独立せず、そのまま会社員だったら、傲慢なまま人生をおくった思います、いまでも十分傲慢かもしれないけど」と話す。独立して混沌を味わって、本当によかった。

『親の心子知らず』というか、最初に認識を新たにしたのは、十代の頃に出会った寺子屋のような学習塾のことだった。当時のあれやこれやを思い出し、どれほどの想ってもらっていたかをリアルに覚った。

仕事でもたくさんの人に出会った。何様でもないけど、何者かではあると見てとってもらい、今も続く関係。そこに意味を感じないわけにはいかない。人の想いを守る、それが自分の意志を守ることにもなる。だから「しあわせ」につながる。

2025年1月30日(木) 晴れ

旧暦でも昨日新年が明け、新旧ともに新春、「立春も」も四日後。ただし来週は近畿でも寒波に見舞われるらしい。そのあと一気に春めくか。長期予報では春は早いらしいから。

— どのようなPAか (3)

『見える仕事の見えない働き』⑤ 守ること(続3)

「バランスのいいものを食べなさい」。早く逝ったせいで遺っている父の言葉は少ない。そのうちの一つ、言われたのは小学3年生ぐらいの時。ひよっとすると、そのときに「バランス」が根付いたか。

仕事をとおして多様な人々と出会った。それは自分の社会勉強にもなった。誰一人として同じ人はいないというこの当たり前のことを実感するし、自分を少しずつ知る機会になった。

ときどき、「そんなバランスのいい人、あまり見たことがありませんよ」を言ってもらう。自分でもそのようだと覚るようになった。

今から20数年前、当時よく会ってお茶していた診断士の知人が近況を話す中で、「腹が立って」、「腹が立つ」という言葉をよく使った。聞いていて、そんなに腹が立つものかと不思議におもった。

そこで、「その〈腹が立つ〉というのは、単に口癖なのか、本当に感情的に腹が立っているのか、どっち?」。年下ということもあって、尋ねてみる気になった。

すると相手は、ははーんという表情をしながら、「本当に腹が立って!」と即答。そして、「リーさんは、そんなことないでしょ!」。こちらも、「うん、ないなあ…」と即答。

実際もともとそんなに腹が立たない。本当に怒ったのはこれまでも数えるほどしかない。ただし、その怒りは濃く、対抗は徹底する。その術を持っているという気はする。

ほとんど怒らないけど怒ると徹底する。ある世界に所属はしても埋没はしない。悪人ではないけど善人というほどでもない。そんなこんなことが、今の社会では「バランスがいい」に見えるのかもしれない。

社会、世界はアンバランスの極みを突き進みつつあるように見える。それに翻弄され、自分を見失いかねない。これからは意識して「バランスのいい人」を守らなければならないかも、いや、しっかり意識していこう。